

ドナウ の 四季

2015年・新春号・No.25

「超一流」には「華」がある	盛田 常夫	1
ハンガリー・ツアー2014、おもてなしの「茶」	瀬川 隆生	2
書評:近藤誠最新著作	盛田 常夫	4
日系アメリカ人の歴史	ヴァルガ・アッティラ	6
私から見たエルテの日本学科	トート・アネット	8
留学生自己紹介	吉野 千織・包原 麻依子・高橋 幸奈	9
みどりの丘日本語補習校	桑名 一恵	12
ハンガリアンダンス(日本人学校)	中谷 和代	13
第21回大吉杯マッチプレー決勝戦対戦記	竹山 朋博	14
ウェールズでゴルフの日々	北川 達彦	15
私の近況	金子 三勇士	16

「超一流」には「華」がある

盛田 常夫

12月のスヌーカー英国選手権で、40歳になったばかりのロニー・サリヴァンが5度目の優勝を果たした。数々のタイトルをもつが、英国選手権は天才サリヴァン少年が17歳で最初に獲得したタイトル。決勝戦は5時間を超える新旧二大スターの大攻防で、サリヴァン9-5のリードから、若手の最有望株ジャッド・トランプの終盤の猛追で9-9のタイとなり、最終フレームにまでもつれ込んだ。数年前にフィットネスクラブのマシンで走りながら、偶然にEurosportsで見た競技だが、あまりの面白さにスヌーカーに魅せられている。

サリヴァンはテニスのフェデラーのような存在だ。競技こそ違うが、この二人のプレーには「華」がある。超一流と呼ばれる人は、必ず独特のオーラを放っているが、それが見る者に「華やかさ」を感じさせる。プレーに「華」があるとはどういうことだろう。

なによりも技術の高さと確かさである。フェデラーは打球の種類が豊富で、常に球に変化を付けて打っている。単調な打球がないから、見ていて飽きない。スヌーカーは回転と強弱をつけて、的確に次の打点に白玉を運ぶ技術をベースにするが、それ以上に重要なのは、球の散らばり全体を判断して、攻略法を見出す戦術勘だ。異種競技の二人のプレーに共通するのは判断の速さ。プレーのテンポが良い。それが見る者にリズムを与える。展開が速い分だけミスも多くなるが、プレーの速さで相手を圧倒できれば、ミスはマージナルになる。

ATP(男子プロテニス)ツアー最終戦のマスターズで、錦織と対戦したフェデラーは全盛期とも思えるほどのスピードあるテニスを展開した。錦織も序盤は速い展開に対応していたが、球が速い室内コートでライジングをたたきテニスを完璧にやられたらかなわない。だが、錦織にもオーラが出てきた。2014年は全米室内連覇からマスターズ最終戦に至るまで、錦織の成長は目を見張るものがある。錦織も超一流の「華」が咲き出した。

すでに錦織のサーブレシーブとバックハンドストロークは超一流。松岡修造が11歳の錦織少年に、20cmも身長が違う高校生

相手に試合をさせたビデオを見たが、プロになった今と同じショットを放っている。バックのクロスやダンウザラインのショットは天性のものだ。錦織のプレーに「華」がある証拠に、ATP年間ベストマッチ(グランドスラム大会部門)の3位(全米の対ワブリンカ戦)と同(ATPツアー部門)2位(マドリッドオープンの対フェッラー戦)に、錦織が勝利したゲームが選ばれたことから分かる。錦織は相手の逆を突く戦術勘に優れている。全米室内決勝で敗れたフェリスティア・ノ・ロペスは、錦織のことをcomplex playerと評していたが、これは打球の予測が難しいということだ。simple playerは絶対に一流になれない。

個人的には、楽天ジャパンオープン決勝の対ラオニッチ戦が印象深い。当代テニス選手の中で最速のサービスを打つラオニッチ戦は、錦織のディフェンス力を証明する絶好の試合だった。この試合でラオニッチのファーストサービスの速度はほぼ230km/h。セカンドサービスも200km/hを超えていた。野球の投手の球速で言えば、それぞれ165km/h、150km/hに相当する。

190km/hのサービスでもコーナーに入るとエースになる。230km/hのサービスは打点に入っても返球が難しい。だから、ラオニッチのサービスゲームはテニスにならない。にもかかわらず、錦織は第1セットのタイブレークでサービスを1球だけブレークして、セットを制した。まさに勝負師の面目躍如である。

テニス選手のファーストサービスの成功率は平均して70%以下。だから、セカンドサービスを狙うチャンスがあるし、230km/hのファーストサービスでも、レシーブの打球ポイントに來ればリターンエースになる。165km/hの投手の球でも、真ん中に入ればホームランされるようなものだ。ただ、その甘い球を見逃さない技術と勝負勘が必要だ。錦織にはこれがある。

最終セット、互いにサービスキープが続き、錦織5-4リードで迎えたラオニッチのサービスゲームで、何球かサーブが甘く入った。剛球サーバーでも後がない状態では、

少し力を抜いてコースを狙おうとする。そこを叩かれて、ラオニッチは2012年の決勝に続いて、ほとんど同じパターンで錦織に負けてしまった。錦織にとってこの勝利はマスターズへのポイントを稼ぐ上でも、非常に大きな勝利だった。

この試合はボールゲームとしては面白くなかったが、力と技の勝負として堪能できた。この若手の有望格二人を比較すると、明らかに錦織に「華」がある。力に頼るラオニッチのテニスは人を驚かせても「華」がない。これにたいし、身長で20cm以上も違う大男にたいし、一瞬の隙を突くテニスで相手を倒せる錦織は、牛若丸のような「華やかさ」がある。錦織がさらに歴史に残る選手になるための条件は、連戦に耐えられる体力とサービス力の強化である。土のコートでしか勝てなかったナダルが、ハードコートでも勝てるようになった最大の要因は、サービス力の強化だった。錦織には是非、体力をもう一段強化して、グランドスラム大会で優勝して欲しい。

やはり「超一流」の要件は力より技量だ。ダルヴィッシュや田中将大も、球速ではなく球種で勝負している。いくら球が速くても、直球とカーブしかない投手は打ち込まれる(巨人の某投手のように)。球種が豊富で、相手に的を絞らせない技術が、打者をきりきり舞いさせる。

声楽の世界でも同じことが言える。どんなに声が悪くても、単調で深みがなく、感情が込められていない歌唱には、やはり「華」がない。その基準で言うと、メゾソプラノのチェチーリア・バルトリの歌唱力は「超一流」だ。声に深みと幅あり、感情移入が素晴らしい。しかも、アルトからコロラトゥーラまで、音域が広がっている。他人が真似できない技量は天性のものだ。Youtubeでバルトリが歌うヘンデルのオペラ「リナルド」の「泣かせてください」を聴くとよい。その後で、若手の人気ソプラノ歌手ヘイリー・ウエステンラの同じ歌唱を聴くと、その違いが一目、いや一耳瞭然となる。

simpleではなく、complexであることが「超一流」の条件なのだ。

(もりた・つねお 「ドナウの四季」編集長)

温熱治療のパラダイムを転換する

温熱治療を根本から見直し、
あるべき手法を示した著書。

曖昧な日常知を科学によって解明した画期的な著作。

オンコサーミア治療器は世界25カ国で利用。
ドイツでは百か所以上のクリニックで、
韓国の主要な大学病院に設置。

好評発売中。定価3200円+税。
大手書店、Amazonにて購入可。

第1章 ハイパーサーミアの歴史と評価

- 1.1 ハイパーサーミアとは何か
- 1.2 ハイパーサーミアの曖昧さと課題
- 1.3 ハイパーサーミアの歴史的概観
- 1.4 腫瘍治療のハイパーサーミア

第2章 ハイパーサーミアの物理学

- 2.1 電磁気学の基礎概念
 - (1) 電磁気現象
 - (2) 電場と磁場
 - (3) キャパシタ
 - (4) 位相シフト
 - (5) インピーダンス
 - (6) 電磁波
- 2.2 バイオ電磁気学
 - (1) 電磁波スペクトル
 - (2) バイオインピーダンス
- 2.3 「非熱」効果
 - (1) 非温度依存 (NTD) 効果
 - (2) 電磁場におけるNTD効果
 - (3) 電磁気による目標選択
 - (4) 電磁気と生体システム

第3章 ハイパーサーミアの生理学

- 3.1 生体におけるエネルギー、熱、温度
- 3.2 生体における温度制御
- 3.3 生体の加熱と体温
- 3.4 加熱による温度の分布
- 3.5 全身加熱と局所加熱の本質的な差異
- 3.6 加熱と冷却: リスクとその回避
- 3.7 温度測定と熱積算量 (ドーズ)

Heat Therapy in Oncology—Oncothermia
New Paradigm in Hyperthermia
Andras Szasz and Tsuneo Morita

腫瘍温熱療法—オンコサーミア
ハイパーサーミアのパラダイム転換— 医術から医学へ
サース・アンドラーシュ / 盛田常夫 [著]



日本評論社

第4章 腫瘍温熱療法

- 4.1 腫瘍温熱治療の基本概念
- 4.2 ハイパーサーミアの手法
- 4.3 熱の作用と併用効果
 - (1) 熱と血流
 - (2) ハイパーサーミアの併用効果
- 4.4 ハイパーサーミアの熱生成
 - (1) アンテナ放射
 - (2) 磁場 (コイル)
 - (3) 容量性カップリング
 - (4) 伝導加熱
- 4.5 ハイパーサーミア治療が抱える問題

第5章 オンコサーミアの理論と方法

- 5.1 電場の利用
- 5.2 細胞燃焼
- 5.3 腫瘍治療における細胞加熱
- 5.4 ミクロスコピック加熱
- 5.5 集束化の原理
- 5.6 温度の役割
- 5.7 安全性
- 5.8 積算量 (ドーズ)
- 5.9 臨床事例

第6章 自然療法としてのオンコサーミア

- 6.1 ホメオスタシスの復位
- 6.2 細胞の自然死の促進
- 6.3 細胞転移の阻止
- 6.4 転移がん細胞に作用

ハンガリー・ツアー2014、おもてなしの「茶」

瀬川 隆生

10年前に始まったヴィシグラー4か国(チェコ、スロバキア、ポーランド、ハンガリー)と日本の協力関係は、2014年は「V4+日本」交流年に位置づけられました。日本ハンガリー友好協会は、ハンガリーで開催される「ハンガリー・日本文化交流」イベ

ンクヴィシグラーでは、ドナウイベントを眺め、センテンドレの可愛い町を覗き、ブタペスト市内の自由観光等を楽しみました。

20年前、ブダペストに仕事で駐在していた私は、ブダペストの街が、更に発展を遂げ、立派になった様子を見て、また、当時、

た。さて、劇場の開会式では、加藤喜久子・在ハンガリー日本国大使館臨時代理大使と猪谷晶子日本ハンガリー友好協会専務理事および、ハンガリー日本友好協会会長ヴィハール・ユディット博士から各々、挨拶があり、記念品の贈呈となりました。

続く舞台では、モーリツ小学校「ドルチェ」児童合唱団が、「さくら」やハンガリー民謡を含む6曲を歌い、テレク・ティラ氏の歌と高久圭二郎氏の三味線による月読神社の歌と演奏、そしてカロシ・ユーリアとジャズバンドによる3曲、藤原新治氏と今井文音氏による日本歌曲2曲等が演奏されました。最後に、オジュジャーニ・ミハイさんとシェール・リビアさんのチャールダーシュの女王」からシルビアの曲を含む4曲、歌と踊りのオペレッタ公演があり、劇場は笑いどブラボーの掛け声、万雷の拍手の中で幕を閉じました。



ント(ハンガリー日本友好協会主催)に参加することを決め、ツアー一行は21名になりました。

今回のツアーは、二つの大イベントを軸とし、一つは、最後のハプスブルグ皇女、エリザベートが愛したグドゥルー城内における、ハンガリー日本友好協会が企画した一連の舞台、コンサートや舞踊ショー。もう一つは、ブダペスト市の国立民族博物館で開催された日本ハンガリー友好協会主催の「書アート展」です。

日本からの訪問団一行は、1週間かけて、世界遺産のペーチで、初期キリスト教墓所、ジョルナイ陶器美術館を見学し、セクスアルドではワイナリーを楽しみ、パンノンハルマ大修道院の世界遺産を見学、バラトン湖を舟で越えて、ヘレンド博物館へ。

小学生だった息子と同じ日本語補習校に通っていたお子様のガイドで、今回の旅行を楽しませていただいたことを知り、時の流れと人の移り変わりに感慨深いものがありました。

グドゥルー宮殿にて

10月28日(火)、16時30分、グドゥルー宮殿内バロック劇場で、ハンガリー日本友好協会主催の日本フェスティバル・オープニングコンサートが開かれました。大勢の参加者の中に、日本ハンガリー友好協会のツアーも招待されて着席。この前に一行は、宮殿館内見学をさせていただきました。エリザベート、愛称シッシーの好きだった城内の内部に、当時の面影を想像しながら、城内の装飾と庭園を楽しませていただきました。

国立民族歴史博物館にて

10月30日から11月9日まで、ブダペストの国立民族歴史博物館では、書道家西浦喜八郎氏の作品18点を展示する「書アート展」が2階貴賓室で開催されました。ハンガリー国元大統領のシュミット・パール夫妻をはじめ、両国に關係する歴々方、約140名が招待され、期間中には、日本大使館を含めて、香・花・書道のワークショップも提供され、好評を博しました。

ブダペスト歴史博物館での書アート展オープニングセレモニーは、10月30日15時30分から始まりました。一階大ホールでの式典は、ケメッチ民族博物館長の挨拶に始まり、ヴィハール・ハンガリー日本友好協会会長、猪谷・日本ハンガリー友好協会専務理事等の挨拶が続き、日本から持参した日

本酒を開けて、加藤臨時代理大使による、乾杯の音頭となりました。

「抹茶と和菓子」のおもてなし

乾杯が終わると、同会場で茶の「おもてなし」が始まりました。日本側ツアーに同行した瀬川隆生が代表を務める古儀茶道藪内流社中は、ハンガリー側ライゾ・コンソル・コルネーリアさんが率いるハンガリー裏千家の方々の全面的な協力を得て、会場の皆様に藪内流立礼点前を披露する運びとなりました。日本から苦労して運んだ「たねや」特製の3種の干菓子100名分と橋本美好園詰の茶名「老松」で心を込めて、おもてなしをいたしました。

この機会に、茶道について、その場で説明した一部をご紹介します。現在では日常的な「茶を飲む」習慣は、茶の原産地、中国で始まり、奈良時代に日本に伝えられたといわれます。12世紀末、中国で禅を学んだ僧侶たちが「抹茶」を飲む習慣と道具を持ち帰り、それは、日本の風土と禅と美意識の中で、「茶の湯」へと発展し、千利休によって、茶道という文化芸術に大成されました。自然と質素を尊び、人々の和と礼儀を大切に「わび茶」の精神は、時代を超えて、茶人たちが研究、価値観の追及を続けながら、脈々と流派を繋ぎ、代表的日本文化の一つとして現代に伝えられています。

茶道には日本芸術のすべて含まれているといわれます。

建築、造園、花、香、絵画、書、焼物、塗物、指物、菓子、料理、振舞、作法、製茶方法等々。すべて、自然素材を使うことも、特徴のひとつです。

茶の湯のもてなしは、茶会です。夏の風炉、冬の炉を使うもてなし方があります。炉の第一ステージでは炉に炭をつぐ所作が披露され、第二ステージでは懐石料理が出され、この後、客は一度茶室の外に出て、

路地の風情を楽しみます。湯が沸いてきたころ、第三ステージの濃茶席へと招かれます。これは濃抹茶一碗を、参列客が数人で飲みまわすものです。最後に第四ステージの薄茶を干菓子とともに、それぞれが頂き、茶会は終わりとなります。大体4時間をかけて行われる、主客一体の茶の湯を楽しむイベントです。

オープニングセレモニー当日は、第四ステージの薄茶席の雰囲気皆様楽しんでいただきました。私どもが亭主となり、限られた時間の中を、皆様に抹茶と和菓子お楽しみいただけた様子でした。

私どもが学ぶ古儀茶道藪内流(藪内家)は、茶家として400余年の歴史を伝えており、武家点前といわれる作法は、草庵の茶と書院の作法を併せてもっています。流祖

会場には、当代藪内流家元の筆による禅語「喫茶去」の軸が掲げられ、利休作の銘「園城寺」写し竹花入れに、秋の茶花を入れました。これには、ブダペストで茶花を探して3日間さまよったという裏話があります。結局、見事なススキを山で採取し、市場で小菊を見つけ、知人宅の庭から紅葉一枝を頂戴して、無事に茶花を仕上げました。香合は幸福をもたらすとされる「ふくら雀」一刀彫運びました。

点前終わりの拝見時、シュミット元大統領が加藤臨時代理大使とともに、(現地で拝借した)美しい御園棚の近くまで来られ、中でも、竹時絵棗や宝林寺禅師作の銘「幸」の茶杓について、興味を持たれた様子で、いくつかのご質問をされました。抹茶を召し上がった多くの方からは「美味



である藪内剣仲は、大徳寺の春屋和尚に参禅して道号を与えられ、親交の厚かった兄弟弟子の千利休から茶室「雲脚」と茶道具一式を贈られ、また、武将で茶人の義兄、古田織部の妹を妻とし、茶室「燕庵」を譲り受けましたが、日本の重要文化財として、今も代表的な茶室になっております。他流と少し所作に違いがありますが、おもてなしの「茶」の心は同じです。

しかった。着物姿は、美しかった」の感想を寄せていただき、関係者一同、安堵した次第です。

また、機会があれば、いろいろな国の方々に、日本文化の茶道の奥深さと魅力、そして実際の「抹茶」を仲間味わう楽しさを伝えたいと願っています。

(せがわ・たかお

日本ハンガリー友好協会常務理事)

書評

近藤 誠著『抗がん剤は効かない』（文芸春秋、2011年）、同『がん治療で殺されない七つの秘訣』（文春新書、2013年）、同『がんより怖いがん治療』（小学館、2014年）

盛田 常夫

1990年代初頭から現代のがん治療にたいする疑念表明と問題告発を続けてきた放射線医師、近藤誠氏の最近の著作である（初期の著作は、1994年に発刊された『がん治療「常識」のウソ』朝日新聞社、1996年に発刊された『患者よ、がんと闘うな』文藝春秋）。近藤氏の著作は相互に重複する部分が多いが、最新著『がんより怖いがん治療』は、定年まで勤め上げた慶應大学を退職した後に書かれたもので、かれこれ20余年間に、大学や学界から受けた圧力や嫌がらせを詳細に記述したところが、これまでの著作にない部分である。

以下、近藤氏の主張の主要部分を私なりに解釈・紹介しつつ、私見を記したい。

抗がん剤はなぜ効かない

心臓から送りだされる人間の血液は40秒前後で体を一巡する。だから、点滴された抗がん剤もまた、40秒前後で体をくまなく巡る。薬剤ががん組織に長時間、留まることはない。とくに血流が激しい肝臓や肺などの臓器に薬剤が長時間留まることはない。がんの種類ごとに、抗がん剤は多数存在するが、どの抗がん剤をとっても、どれほどの分量が腫瘍組織に入り、そこにどれほどの時間留まるのかについて、誰も答えることができない。確かなことは、抗がん剤という毒薬が体全体に散らばることだけである。要するに、薬剤ががん組織に効く効率は非常に悪い。だから、抗がん剤を体内に入れば、健康組織が壊れるか、がん組織が壊れるかの競争になる。

抗がん剤が直接作用する白血病や悪性リンパ腫のような血液がんに抗がん剤が有効なことは理屈に合う。しかし、幼年期の白血病が「寛解」と判断されても、成人した後に抗がん剤使用の副作用が出る事例が報告されているから、この場合も抗がん剤が完全に無害で副作用がないとは言えないのだろう。

抗がん剤の効率性の悪さから、「分子標的薬」と称した抗がん剤の開発が進められているが、しかし、がん細胞だけに作用する抗がん剤は存在しない。「分子標的薬」も劇薬指定されており、肺がん治療の「夢」分子標的薬と宣伝されたイレッサが、死亡事故を起こして訴訟問題になっていることは、周知の事実である。

近年、抗がん剤の使用を拒否する人々が増えている。補完的な治療法や統合治療、あるいは生活の質(QOL、quality of life)を重視する考え方が、医師の間でも広がりつつある。「がんは縮小しました、しかし患者は苦しみながら亡くなりました」というのでは、本末転倒の医療行為だからである。

「がんもどき」論

良性腫瘍と悪性腫瘍(がん)の区別は簡単ではない。良性腫瘍とは転移しない腫瘍であり、自然に消滅するものもある。人間の細胞の生成(DNA転写)過程において、転写ミスがそれなりの確率で生じることが知られている。加齢とともに転写ミスの確率も高まるが、免疫システムが有効に機能していれば、転写ミスによる細胞

変異が淘汰され、生体機能を脅かすことはない。しかし、免疫システムが弱化し、変異した細胞を淘汰できなくなれば、それが制御不能な悪性腫瘍に転化すると考えられる。

さて、問題はここから始まる。現代のようにがん検診制度が盛んになると、良性か悪性かの区別ができないまま、腫瘍が発見されればすぐに治療が開始される。組織の病理検査のために生体検査が行われる、あるいは良性腫瘍でも、一定の大きさがあれば、医師はすぐに手術や抗がん剤治療を勧める。ほとんどの人は「まだがんが小さいうちに治療するのが最善」と考えるが、治療が不要なものに手術や抗がん剤を施せば、副作用に苦しむことになる。

近藤理論の一番重要な点は、転移しない良性腫瘍は治療しないで、放置しておくのが最善の治療法だという点にある。このような転移しない良性腫瘍は「がんもどき」と名付けている。「がんもどき」は治療する必要はなく、可能な限り、副作用のない治療法や対症療法で十分だというのが、近藤理論の核心である。

検診不要論

近藤理論が医学界に与えた最大の脅威の一つに、「がん検診不要」論がある。現代の医療ビジネスの中で、「がん検診」の占める位置は大きい。ところが、近藤理論を認めれば、がん検診は無駄だということになる。なぜなら、悪性腫瘍であれば、検診で発見される大きさになるはるか前に転移が始まっているから、発見部位を治療しただけでは、がんを治療したことにはならない。また、検診によって、良性腫瘍に不要な治療が施され、それが生活の質を下げるたり、治療の副作用で健康を害する可能性がある。

最近の欧米の研究では、種々のがん検診で、検診を受けたグループと受けなかったグループの間のがん死亡率に、有意な違いが認められないと報告されている。ところが、日本では、逆に、検診対象のがんの範囲を広げる方向に進んでいる。

近藤氏が「がんもどき」論を発表した後、所属の慶応大学医学部教授会から論文撤回・謝罪を求める働きかけがあり、近藤氏が対応に苦慮した状況が詳細に描かれている。幸い、暗黙の辞職勧告はあったが、暴力的に近藤氏の言論活動を圧殺することはなかった。不遇の中の唯一の救いである。

がんは局所的な病ではない

近藤氏の「がんもどき」論は、がんという疾病の本質を突いている。「がんもどき」論を別の形で表現すれば、「がんは局所的な疾病ではなく、生体組織の全体機能にかかわる疾病である」と言い換えることができる。もしがんが局所的な疾病であるなら、その部位を治療すれば済むが、そうでないところに、がん治療の難しさがある。

もし良性腫瘍であれば、これは局所的な疾病だから、全身に毒を入れるような抗がん剤治療は百害あって一利なしだ。腫瘍が大きくなって生活に不都合が出た段階で、対症療法的な治療を施せばよい。

ところが、悪性腫瘍の場合、発見された時にはもうすでに転移が始まっているから、局所的な治療では治療の効果は期待できない。ただ、この場合も、転移がすぐに生命を脅かすことはなく、生命維持の中枢臓器の機能が弱り始めて生命が脅かされる危機段階に入る。問題は、「転移が確認されたらすぐに抗がん剤治療を始めるべきか否か」である。近藤氏はもちろんこの段階でも、抗がん剤や外科手術のような標準治療が延命効果ともつとは考えない。逆に、苦しむ時間を増やすだけだと考える。

それなら何もしないのだろうか。これまで、近藤氏は相対的に副作用の小さい放射線治療を勧めてきた。しかし、近藤氏は今その放射線治療からも撤退している。それほど優位点が認められないからである。

近藤氏がもう一つの代替療法と考えているのは、焼灼(しょうしゃく)法である。近藤氏はこの分野に明るくないらしく、「ラジオ波による焼灼法」で具体的な何を指しているのか説明していない。

いずれにしても、がんが局所的な疾病でないとしたら、腫瘍組織が一時的に縮小したことだけで治療の効果を測るのは意味がない。局所的治療で転移を留めることはできないし、抗がん剤を止めれば再び腫瘍が大きくなる、あるいは外科手術で除去したはずの腫瘍が再発する。このため、最近では、免疫療法を謳う治療法が幅を利かせるようになっていいる。自らの血液を採取して培養し、癌細胞にたいする抗がん細胞を増殖してから、再び患者の体内に戻す免疫治療法だ。しかし、現在のところそれほど成果がでていない。免疫療法のみならず、最新治療と称するもののほとんどが非常に高価で、その割に効果がないのが現状である。

がんはどう向き合うか

一昔前は、がんと診断されると人生の終わりだと思われたが、今は患者の考えも変化しつつある。若い人が悪性腫瘍に罹患するのは悲しいことだが、年配者ががんと診断されて悲しむことはない。人の死はいろいろある。交通事故で突然亡くなることもあれば、くも膜下出血、脳溢血、心筋梗塞で突然に死ぬこともある。徐々に命を失っていくのが良いのか、突然に命を失うのが良いのか、人それぞれに思いは異なるだろう。しかし、少なくとも、突然に亡くなるより、一定の時間的猶予があり、残された時間のなかで人生を整理し、必要な事柄を家族に伝えて死んでいく方が、本人だけでなく家族にとって幸せではないだろうか。突然に失われた命には、常に後悔が伴う。

がんという疾病が加齢に伴う必然的な現象だとすれば、それとどう付き合っていくかという人生観や終生観が必要なだけだと思う。生命維持にとってクリティカルな臓器に転移し、その状態が悪くなるまで、がんは人を殺さない。治療で苦しんでも治るなら良いが、治療しても生きる時間に大差ないなら、生活の質を維持して死にたい、無駄な手術で苦しむことを避けたいと考えるのは、自然なことである。

近藤氏は、本物のがんなら、早期に発見されるよりは、末期に発見された方が良いと主張する。ぎりぎりまで人生を全うすることができるし、緩和ケアを行えば老衰のように死を迎えることができる。すべてがそういう訳にはいかないだろうが、大切なことは、がん

という病にたいする理解を深め、がん治療にたいする明確な意思をもつことである。

温熱療法の可能性

近藤氏は大学を定年退職して、セカンドオピニオン外来(http://kondo-makoto.com/)を開いた。治療をおこなわず、がん患者への相談とアドヴァイスを行っている。既述したように、近藤氏は一定の留保を付けて、焼灼法の有効性を認めている。ただ、その内容が明瞭でない。

焼灼法は対象部位を焼き切る技術である。広義にはアブレーションと呼ばれる高温による組織の焼灼技術であるが、これは腫瘍に複数の電極を挿入して、直流(ガルバーニイ)電流を流して腫瘍部位を焼き切る方法である。体内の腫瘍組織を焼く場合には開腹手術が必要だが、これは患者に大きな負担を与えるし、悪性腫瘍が局所的なものでないとしたら、腫瘍部位を組織破壊(ネクロシス)しただけでは外科手術と同じ効果しかもたない。ここにも、がんという疾病の難しさを見ることができる。

がんに侵された組織を熱で破壊するという医療行為は、ヒッポクラテスの時代から存在するもっとも古いがん治療法である。中世では焼きごてを表面がんに近づけて、放射熱で治療する方法が存在した。しかし、電磁気理論が確立される19世紀までおよそ2500年間、温熱療法はプリミティブな域を出るものではなかった。現在もなお、温熱療法のプリミティブな理解が蔓延している。

現代の温熱治療は、開腹することなく、体内の腫瘍組織に熱を発生させることを目的としている。しかし、悪性細胞のみに熱を作用させるという集束性の実現は、技術的に非常に難しい。日本のメーカーが京都大学工学部の先生方と30年前に開発した高周波温熱がん治療器は、がん組織を高温で組織破壊(ネクロシス)するものだが、高い出力での治療は患者に大きな負担を与え、かつ周辺組織をも熱してしまう。また、腫瘍組織近辺の温度を測定するために温度センサーを刺し込むことを奨励している。ハンガリーの物理学者サース・アンドラーシュが開発した加温技術(オンコサーミア)は低出力・非侵襲的な方法で、がん組織への熱エネルギーの集束性を高め、がん細胞のアポトーシスを誘発する手法である。体に優しいがん治療器として、世界30カ国で治療に使われている*。

がん治療に奇跡的な手法はないが、生体の摂理にかなう方法で、がん細胞のアポトーシス(細胞の自死)を促す温熱療法は、痛みを和らげる副作用のない治療法である。アポトーシスの復位が、免疫効果を活性化させることも分かっている。このような体に優しい現代技術に、もっと注目すべきだろう。近藤氏にもこの分野への視野を広げてもらいたいものだ。

* 千葉大学付属病院では2年前から末期の食道癌患者にたいするオンコサーミア温熱治療の臨床研究が行われている。また、2015年2月からは富山大学付属病院で、呼吸器系腫瘍、消化管・消化器系腫瘍、乳癌・産婦人科系腫瘍、耳鼻咽喉科領域の腫瘍、整形外科領域の5つの診療科で、臨床研究が始まる予定である。

(もりた・つねお 立山R & Dヨーロッパ)

日系アメリカ人の歴史

Varga Attila

2012年の秋、私は修士論文を書くために南カリフォルニア州で日系アメリカ人の歴史について、とくにアメリカの強制収容所に関して研究活動をしていました。ハンガリー人としてこのテーマ選択は奇妙に見えるかもしれませんが、個人的な理由があります。私の叔母、谷野貞子(Sadako Tani-no-Szathmáry)も1940年代に収容された日系人たちの中にいました。叔母は残念ながらもう他界してしまいましたが、子供のころ私にローワー(Rohwer)という強制収容所の体験についてよく話してくれたから、日本学科の学生として、このヨーロッパではあまり知られていないテーマを選びました。

現在もアメリカには多くの日系人が暮らしていますが、彼らは自分ではアメリカに生きるアメリカ人という意識を持っています。

最初にアメリカに渡った日本人はジョン万次郎と呼ばれた人でした。でも、日系アメリ

カ人の本当の歴史は明治維新の後、1968年に日本人最初の移住者153人が砂糖きび農場の労働者としてハワイに渡ったときに始まったと言えます。1968年がちょうど明治元年にあたることから、彼らは「元年者」と呼ばれました。この「元年者」は渡航地で奴隷にも等しい取り扱いを受け、明治政府が救出に乗り出さなければなりません。1881年には、ハワイ国王カラカウアが来日して、中国人に代わる労働力を求めて日本人移民誘致を日本政府と交渉しました。それによって1885年には政府間の契約による官約移民1930人がハワイに渡りました。ハワイの砂糖きび農場では、労働監督はいつもヨーロッパ人で、日本人は一緒になって働く肉体労働者でした。でも、ハワイでの日本人の同化は成功でした。日系人の定住が進んで、1941年にはハワイ人口の40%は日系アメリカ人に

なりました。

日系人移民は、いつかはお金をたくさんためて日本へ帰ることを夢見ていたため、低賃金で懸命に働きました。しかし、アメリカ本土にあまりにも短い期間に日本人移民が殺到したため、仕事を奪われることを心配したアメリカ人による日本人排斥の動きが強まりました。日本人は法律で「帰化不能外国人」と規定され、結局1952年までアメリカに帰化することができませんでした。当時のアメリカでは異人種間の結婚が法律で認められていなかったため、日本に帰って結婚相手を見つけるだけの資金がない男性は、日本にいる親戚を通して写真を交換することで結婚相手を見つけました。これが「写真結婚」と呼ばれるシステムで、1920年代には多くの「写真花嫁」が渡来し、それにより日系コミュニティの発展



が促されたのです。日系コミュニティの大部分はアメリカのワシントン州とオレゴン州とカリフォルニア州にある「日本町」という地区に住んでいました。やがてアメリカ生まれの二世が増えるとコミュニティも大きくなり、さまざまな社会活動を提供するようになり、二世に日本語と日本文化を教えるために日本語学校も作られました。子供たちは放課後、様々なクラブ活動やスポーツを楽しんで、毎日を過ごしたのです。二世はアメリカで生まれたからアメリカ合衆国国籍も持っていました。二世はアメリカ文化の影響を強く受けて成長しました。国立学校に通い、クラスメートと同様に英語の本や雑誌を読み、ハリウッド映画を楽しんだのです。その一方で彼らは一世の両親や日本語学校の教師から日本的な道徳心や文化も学びました。このような二種の文化的影響を受けて、二世は日系アメリカ人となったのです。来日して、日本の学校と大学で学んだ二世は「帰米」と呼ばれました。1940年頃には二世の大部分はまだ高校生以下でした。

一世の多くは農業に携わり、その大部分はカリフォルニア州に集まっていた。日本の方法を使ってアメリカの西部農業開発に大きな貢献をしました。しかし、白人の反日感情も高まってきて、一世の大成功が反日運動に火をつける引き金になってしまいました。1908年の「紳士協定」をうけて、日本政府はアメリカへの日本人移民を制限しました。1913年にはカリフォルニア州で実質的に日系人土地所有を禁止する「外国人土地法」が成立し、日系移民たちはアメリカ生まれの二世の子供の名義で土地を所有しなければならなくなりました。1920年の新外国人土地法は、1913年の法律より厳しいものでした。1924



Courtesy of the Japanese American Historical Society of San Diego

年、排日移民法が成立し、日本からの移民が事実上停止されました。白人の反日感情は日系コミュニティの毎日の生活の毒になってきて、1930年代に反日感情は悪化の一途を辿りました。

第二次世界大戦期は日系人にとってつらい時期でした。1941年12月7日、日本軍による真珠湾攻撃が行われた直後、地元当局とFBIがハワイとアメリカ本土の日系コミュニティ・リーダーたちを拘束しました。翌日の朝6時半まで737人の一世たちが逮捕され、48時間後にはその数は1291人までになりました。かれらは正式な容疑も告げられることなく突然逮捕され、家族は面会を許されませんでした。逮捕された一世の多くは、そのまま司法省管轄の敵性外国人収容所に送られ、戦時中を過ごすこととなりました。1942年2月19日、ルーズベルト大統領は、大統領行政命令9066号に署名しました。事実上、この命令が日系アメリカ人の強制立ち退きから強制収容への一連の軍事行動を可能にしました。3月2日にアメリカの西海岸が軍事地区になり、それによって4月の間に西海岸に居住していた約12万人の日系人やアメリカ国籍の二世はスパイ行為や破壊行為の事実がないにもかかわらず、「軍事上の必要性」とい

う名目の下、強制立ち退き・収容を余儀なくされたのです。アメリカ生まれの日系人も外国生まれの日系人も同様に、アメリカ国内10箇所に点在した強制収容所に収容されました。

収容所は湿地帯や砂漠地帯などの住環境には適さない地域に作られました。有刺鉄線に囲まれた敷地内にバラックが建てられ、6メートル四方の一部屋に一家族が暮らしました。部屋には水道もなく、共同の洗面所と洗濯場に行かなければなりません。日系人は収容所での暮らしをよくするために、施設設備を改善し、学校や娯楽施設を作るなど、様々な努力や工夫をしました。しかし、収容所内コミュニティの生活はプライバシーがなく、長い列と狭苦しい生活空間、混雑した食堂と浴場など、いつも混乱をきたしていました。男性と女性が別れて食事をしたり、子供は子供だけで集まって活動したりする間に、日系人家庭での親の権限も次第に弱まっていきました。戦時中の反日ヒステリーの中で、「民主主義」「自由」「人権」というアメリカの理想は無視されました。

第二次大戦の終結とともに、収容所が閉鎖され日系人は西海岸に戻り、家屋破壊や周囲の敵意に直面しながらも生活の立て

直しをはかりました。50年代には日系人はもう一回我慢しなければなりません。この年代は日系家族の人生とコミュニティの再建時代でした。70年代に戦後補償運動が始まり、レーガン大統領が1988に強制収容に対する補償を規定した「市民的自由法」に署名しました。アメリカ政府による謝罪文と2万ドルの個人補償金が被強制収容者に渡されました。日系アメリカ人のコミュニティは現在栄えています。

参考文献

1. 森茂岳雄・中山京子・川崎誠司(2001)『日系アメリカ人の歴史:アメリカに渡った日系移民の歩み』全米日系人博物館。
2. 島田法子(2005)『第二次世界大戦下の二世教育』日本図書センター。
3. 日系アメリカ人強制収容所の関連年表 全米日系人博物館 マナビ&スミ・ヒラサキ・ナショナル・リソース・センター http://www.janm.org/jpn/nrc_jp/internch_jp.html
4. Daniels, Roger - Taylor, Sandra C. - Kitano, Harry H. L. (2001), Japanese Americans - From Relocation to Redress, University of Washington Press. (ヴァルガ・アッティラ)

留学生自己紹介

感謝の1年

リスト音楽大学ピアノ科

包原 麻依子

私は2014年2月よりリスト音楽院のパートタイム生としてハンガリーに留学し、もうすぐ1年が経とうとしています。12月のブダペストの町は、日ごとにクリスマスのイルミネーションで華やいでいき、とても素敵です。こちらでの生活にも大分慣れ、余裕でできたところですが、留学生活も残り1か月となってしまい、寂しさと名残惜しさが募ります。

私は岐阜でのマスタークラスでファルヴァイ・シャンドール先生にみていただいたことがきっかけで、日本の大学院を1年間休学し、留学することにしました。

一人暮らしも初めてで、不安でいっぱい。ハンガリー生活が始まると、今まで自分がいかにまわりの人にお世話になって生きてきたかということにあらためて気づきました。最初は新しい環境に馴染めず、外に出るのがすらくわて色々つまずいてしまうことが多く、生活するのに精一杯でした。けれども、ハンガリー、そしてリスト音楽院は私をたいへん温かく迎えてくれ、わからないことを親切に教えてくださったり、落ち込んでいる時に励ましてくれたり・・・その数々をすべて挙げたらきりがなくらいです。こちらでの生活に慣れるよう、支えてくれたまわりの方々、先輩、友人みんなのおかげで1つ1つ乗り越える事ができ、心から感謝しています。

そのようにして生活も徐々に落ち着いていき、先生のレッスンも始まり、集中してピアノを弾くことができるようになりました。パートタイムは基本的に専攻のレッスンを受けるためのコースなので、レッスンがある日以外はほぼ自由で、たっぴりとピアノに向かうことができます。日本にいれば、時間に追われてしまうことも多いですが、そのようなことを忘れ、ただ音楽ができるこの環境は私にとって本当に貴重なものでした。

学校では1日4時間練習室を使用することができます。祝日などで入れない時以外はほとんど毎日学校に行き練習してしまし

た。たっぴりあるはずの時間もあっという間に過ぎていきました。そこではハンガリーの学生だけでなく、様々な国からの留学生たちが練習していて、彼らの姿をみるのも私の大きな励みとなりました。とても楽しそうにピアノを弾く人、外まで演奏のエネルギーが伝わってくる人、軽々と難しい曲を弾きこなす人。どの練習室から聞こえる音も活気があって、本当に刺激的です。人種も違い、それぞれが持つ文化も言葉も違いますが、みんな真剣に音楽を磨いていて、自分もその中の一人として勉強できることを幸せに感じます。

毎日ほぼ同じ部屋で練習していたところ、「ここに住んでいるの?」と冗談を言われてしまいました。こうして気軽に声を掛けてくれ、たとえお互いに話したことがなくても廊下ですれ違えばハロー!とあいさつしたり、とてもフレンドリーで、これがリスト音楽院の素敵なおところだと思います。とくに印象的だったのは、練習室で前の人がよ



く"Have a good practice!"と声をかけてくれることです。日本でも頑張っねという言葉をかけたりしますが、初めて声をかけてもらった時はとても新鮮で嬉しかったです。

さて、ファルヴァイ先生には毎週1回レッスンを受け、いつも親身になってアドバイスをくださいます。先生はとなりでお手本をみせてくださることが多く、繊細な音からエネ

ルギッシュな音まで、大変多彩な音色を持っていらっやいます。先生のような音が出るようになりたいなとも思います。

今取り組んでいるリストの口短調ソナタ。私の克服すべき要素がたくさん詰まっているこの曲を、先生が課題として与えて下さいました。なかなか思うように弾けず悩んでいると、先生が、「少しずついいんだよ。これはあなたにとってstrangeな感覚だから」と声をかけて下さいました。今までリストをあまり勉強したことがなかったのですが、先生の温かい言葉にとても勇気づけられました。上達しないと焦ってしまいがちですが、音楽の勉強には忍耐が必要とよくいわれます。妥協せずに、少しずつでも成長していくことが肝心なのだあらためて思いました。

先生のアドバイスには重みがあり、1年間勉強させて頂けたことを幸せに思います。残りの時間はわずかとなってしまいましたが、しっかり努力を続けていきたいです。留学先としてハンガリーに来ることができて本当によかったと感じます。

音楽以外でも、心温まる体験を何度もしました。いつも通っているうちに銀行のお姉さんと仲良くなったり、スーパーのおじさんとあいさつするようになったり、そのようなことは日本ではめったにないのではないかなと思います。ハンガリーの人たちの優しさを、日本に帰っても忘れないようにしたいです。そして、いつかハンガリー人が日本で困っている姿に出会ったら、私がしてもらったように、助けてあげたいです。

最後になりましたが、毎日無事に過ごし、勉強に励むことができたのは、ここでのお世話になったすべての方々のおかげです。この場をお借りし、心から感謝いたします。こちらでの経験は、すべて私の糧となり、ここで学んだことを大切に、これからも精進していきたいと思ひます。

そしていつかまたハンガリーを訪れることができれば嬉しいです。

(かねはら・まいこ)

留学生自己紹介

ハンガリーで英語、皆さんどう思いますか?

エトヴェシュ・ロラード大学

人文学部英語専攻

高橋 幸奈

聞いてください。私はハンガリーに、英語を勉強しに来ました。なぜ、どうしてと皆さんが疑問に感じると思ひます。確かに、ハンガリーは英語が母語ではないし、文化についても慣れ親しんだものではありません。だから、勉強はおるか、生活することですら不自由なのでは、と考える方もいるでしょう。けれど私は自信を持って言えます、ハンガリーは英語留学を考えている人にとって最高の場所であるということ。

まずは自己紹介。私は明治大学国際日本学部国際日本学科に所属する2年生で、ハンガリーのエトヴェシュ・ロラード大学人文学部英語専攻に約1年間の協定留学プログラムの留学生として来ました。学部の理念として、日本の文化を学びそしてそれらを世界に発信し日本の良さ、素晴らしさを広めていくとあります。その実現を目指して日本の大学では、例えば日本の歴史、文化、経済など様々な方面から日本とはどのような国なのかを研究し、その一方で世界との交流を図るための英語学習を進めていました。もともと留学への興味はあったのですが、その時の私は「留学と言えばアメリカ」という固定観念に縛られていて、ハンガリー、ましてやヨーロッパへの留学など微塵も考えていませんでした。けれど私自身、アメリカにとりわけ興味があったわけではなかったので語学の勉強以外にその国へ行く理由が見つからず、それが留学へのモチベーションを下げる要因になっていたかもしれません。そしてあるとき、ふと疑問に思ったことがあります。なぜアメリカでなければいけないのか、アジア、ヨーロッパ諸国でも留学は可能なのでは

ないのか。グローバル化の影響で、今英語は世界の標準語となっています。つまり、それは母国が英語ではない国の人たちでさえ英語が話せるということで、裏を反せば世界中どの国でも英語を勉強することができ、留学する国としてアメリカだけに固執する必要がなくなったということです。

そこからの私は今までの遅れを取り戻すかのように英語学習に精を出し、また留学に関するあらゆる情報を集められるだけ集



め始めました。そこで見つけたのです、ここハンガリーを。正直に言うと、最初はハンガリーと聞いてもいったいどこにあるのか、まじらずハンガリーという国はいったいどんな国なのか全く知りませんでしたし、知る機会もありませんでした。けれど、調べていくうちにハンガリーの魅力にそれこそどっぴりはまってしまい、ユーラシア大陸の食文化のつぼと呼ばれるハンガリー料理、様々な国の文化・歴史が息づく街並、オペラなど一流の音楽と気軽に触れ合える環境、これらすべてが私の心を掴み、またそれらは私にハンガリーへの留学を決断させるのに十分すぎるくらいでした。今思い返してみても、この時の出会いというのはもしかしたら運命だったのかもしれない。これが私のハンガリー英語留学の第一歩でした。

ハンガリーでの留学が始まってからというもの、それこそ今までは単なる話のタネの一つや二つになることですが、当時の私にとって乗り越えがたい大きな困難に幾度となく直面してきました。とくに大学の授業。私は人文学部英語学科に所属していて、各

の学生さんたちと一緒に英語を学んでいます。授業も英語の基礎からきっちり勉強するものから、英語で様々な分野(文化研究、観光事業等)まで多種多様です。一番驚いたことは、英語が母国でないにも関わらずその学生さんたちの英語能力が非常に高かったことです。彼らに聞いてみると、英語を勉強している年数は日本人のそれとほぼ変わらないようですが、明らかに彼らと私との間には大きな隔りがありました。それ

故に、慣れ始めの頃は授業中ただ座っていることしかできず、彼らのすごさに圧倒されたまま終わってしまうということがほとんどでした。自分の思うようにできないことがとても悔しく、授業が終わるごとに気落ちし、時には悔しさから泣いてしまったこともあり

ます。けれどこの気づきというのは日本では絶対に得られないものだし、この世界との「差」を自ら経験するために留学を決心したのも事実です。異国の地での大学生活は日々私に驚きと試練を、またそれを乗り越えたときの大きな感動と満足感を与えてくれます。留学が始まって約3か月経った今、正直まだ授業にやっとなことについているといったレベルではありますが、そんな中で着実に成長している自分を日々実感しています。

残りの約6か月の間、私はこれからも様々な困難にぶち当たることでしょう。そのたびに落ち込んで、努力して、そして乗り越える。この過程を一步步踏みしめながら生活することはこの留学をより有意義なものにするために必要不可欠なことです。確かに簡単なことではありません。けれどそれに挑戦していくことこそ、私の中の殻を破る唯一な方法だと思うのです。

(たかはし・ゆきな)



補習校と我が家

桑名 一恵

現地校に通う子供を持つ親として、我が子にとって第一もしくは第二国語であろう日本語を週に一度の限られた時間ではあるが携われる環境を与えてられる場所がここに存在する事に感謝している。自身の環境だけでは、とてもじゃないけどこの環境を作ってあげる事は出来なかつただろう。校舎も現地校の教室を借り、運営の中心になるのは保護者で担当をそれぞれ振り分けて動いている。日本から講師が派遣されてくるわけではないが、保護者のサポートは半端なく協力的で、問題が発生すれば、それを互いに言い合える。

週1回の授業で教科書1年分を終わせる為、かなりの量を毎回完結させないといけない。各単元のピックアップや講師陣の授業プランがカギとなる。各講師陣が試行錯誤しながら考案している授業はとても興味深い。最近では「音読」を強化しているが、講師は「音読」一つとっても様々な形で習得してもらえるようにとアイデアを練ってくる。

先日授業参観をさせて頂いたが、とても新鮮だった。講師が用意した数枚のカードには、シチュエーションが一動作ずつ書いてあり、カードを1枚もしくは2枚引き、書いてある動作を付けて読むというものだった。例えば、大きな言葉で、早口言葉で、後ろを向いてなど、遊びの要素を入れたものだ。生徒たちの集中力はすごかったし、内容の理解度が高かった。何よりも読むことを楽しんでいた。家での宿題では椅子に座り、はっきり読むことに気を付けているが、型にはまらない授業形態も大切だと思った。毎回このような風景を見られるわけではないが、笑顔で習得することの必要性を感じさせられた瞬間だった。

当初は、我が子に日本語を勉強して欲しいとより、日本語もしくは日本の文化を実体験して感じてもらいたいと思っていた。授業は週末の午前中なので仕事と重なることもあるから、送り迎えが難しいと思ったが、他の問題に比べたら小さな問題でしかなかった。

初めは日本語や日本文化への興味を高めるということより、日本語を使った遊び、友達や大好きな先生に会えることの方が主で、私もただ見ていただけだった。夏に日本へ帰省して、日本の家族や親せき、行った先の同年代の子供たちとの会話や、当地の「空手」で通訳をするなど本人の環境の変化に、「最近日本語やんなきゃって思うんだよね」、「このアニメや映画を知る為には日本語がわからないと無理だね・・・」というようになってきた。「興味があるなら、どんどんやったらいいじゃない。私も協力する」。

本人が自分の意思を表現する年齢になってきたのだろうが、親としてとても嬉しく、惜しみなく協力して行こうと決心することが

できた。補習校に通っていたものの学習自体がだいぶ遅れているので、その空白を埋めるように、日本語の環境を家でも外でも作るようにしている。

普段は母と子でしか日本語会話が出来ないが、DVDや本(漫画やアニメ中心だが)を通して単語も表現も豊かになってきた。我が家にとってインターネットは欠かせず、動画や資料を一緒に探し、難しい言葉や知らないものがあればわかりやすく説明していく。今まではハンガリー語で説明したほうが簡単だろうと思っていたものも、本人が分かるような日本語で説明し始めた。これはちょっと根気のいるもので、時には自分の説明に自信がないことも良くある。時には数時間をかけて夜遅くまで学習をつきっきりでしたこともある。教科書も進級する度に難しくなっていく。漢字や言葉の表現の意味を説明しながら読み仮名を振っていく作業。漢字の繰り返し学習など、ハンガリーの学校では学習しない方法が、なぜ大切なのかと説明しながらの作業。こうして、サポートしなくてはならないものが次々と出てきていた。共に学習していくと、次第に我が子に適している学習法が見えてきて、何が得意で何をクリアしなければならぬかを、本人にアドバイス出来るようになっていた。

この1年間を見ると、我が家ではこれまでになく日本語が飛び交っている。日本語の力は2学年ほど下のレベルだが、日本語・日本文化に興味湧き始め、もっと出来るようになりたいと思っていることが嬉しい。この1年間はほぼ毎時間、各担任と補習校での様子や家でのサポート報告や相談を行った。本人がやりたいと思っているものがあれば、惜みなく体験させたいという親心と責任がそうさせている。

果てしなく続く漢字学習も今では本人が自ら学習し、結果を出すようになってきた。まだまだ宿題に付き合わないといけないが、自分の学習スタイルが少しずつ分かってきたようだ。これを継続させて来シーズンからは自ら学習できる体制を整えたいと思っている。

今年度は夏に日本人学校に体験入学をさせて頂いた。我が子にとって初めて日本人の日常生活を体験する機会となった。かなり不安を抱いていたが、数日で環境にも慣れ、日本人学校に早く行きたいと言うほどまでになった。もちろん、日本人学校の子供たちや先生方のサポートあってのことだ。体験入学が終わる頃には、取っつきにくかった日本という環境が大好きになっていく自分が嬉しかったようで、嬉し泣きを何回もした。嬉しくて泣くと言った感情にさせてくれた日本人学校に感謝している。

補習校の日本語環境の中にも毎回発見があり、それを楽しい嬉しと思わせてくれる学校があることに感謝したい。

(くわな・かずえ プダベスト在住)



ハンガリアンダンス

中谷 和代

ハンガリーに再び暮らすことになり、この3年間で観たハンガリアンダンスの舞台は数えきれない。かつてハンガリーの田舎町に住んでいた頃、ハンガリアンダンスに魅了されたにも関わらず、数回しか観るチャンスに恵まれなかった。だから、今回のハンガリー生活の中で再びハンガリアンダンスの舞台を目の当たりにした時、15年前初めてその舞台に出会った時の感動がまた心に甦った。

「ハンガリアンダンスが好きだ」とハンガリーの古くからの知人に話すと、「ハンガリアンダンスは世界で一番素晴らしいダンスだからね」と返ってきた。確かにその通りだ。ハンガリアンダンスは本当に素敵だと思う。あの中欧らしい雰囲気漂う独特の音楽、豪華な刺繍が施されているにも関わらずどこか素朴な衣装をまとったダンサーたち、そして何

よりもあの楽しげな歌と踊り、あっという間にハンガリーの大平原や、自然豊かな草原、村の広場、農家の軒先へといざなわれ、まるで自分があの輪の中で一緒に踊っているような感覚にとらわれ何とも言えない楽しい気分になる。

11月のブダベスト日本人学校のドナウ祭では、小学部5,6年生はハンガリアンダンスを発表した。ハンガリアンダンスのプロの先生が合計8回ダンスを教えに学校に来てくださった。初打ち合わせで最初にそのハンガリー人の先生方に学校の図書室でお会いした時は、特に何も感じなかった。しかし、一旦ダンスの指導が始まった時、その先生方はやはりダンスのプロだと強く感じた。その頃、プライベートで週末に出かけて行って観たハンガリアンダンスの公演、舞台上で偶然見かけた先生方、「あ！ハンガリアンダンスの先生だ・・・」。彼らは、輝いていた。

たったの8回でハンガリアンダンスを覚えることはとても難しく、私達学級担任も、ビデオに写真といった記録に加え、子どもたちに交じってステップを踏んだ。今回のダンスは、3拍子。頭の中で拍を数え、ターンやステップのタイミングを計る。そしてそのタイミングは子

供たちのポジションによって異なる。すなわち、一人ひとりの子どもたちが自分のステップ、自分の動きを各々覚えなければならなかった。ダンスの先生方が帰られた後、すぐに頭の中のテープを巻き戻す、そして教えていただいたばかりの動きをそれぞれが再現する。時には実際にビデオやデジカメの記録を巻き戻



し、確認しては踊り、それを繰り返して少しずつではあるが一歩一歩着実に、それぞれの踊りを自分のものにしていった。「ハンガリーの先生方は、日本の子どもたちがどのぐらい熱心に学ぶか、見ておられるだろう。だって、日本の子どもたち＝私たちだから」と、毎回のレッスンの受講を呼びかけた。実際、子どもたちの意識はとても高かった。一回一回のレッスンで学んだことは、必ず全て習得して、次のレッスンには積み残さないことを目標としていた。お稽古事というのは、熱心に指導して頂くと思ったら、まずはより熱心な生徒でなければならぬというわけだ。こうした努力の結果、子どもたちは、複雑なステップや動きを次々に体得していった。

ドナウ祭はダンスの発表会ではなく、学校教育の中で学習してきたことを発表する場である。子供たちは、1学期にハンガリー刺繍とその歴史について学習してきた。2学期は、ハンガリーの歴史とハンガリアンダンスについて学びを深めていきたいという考えから、ハンガリアンダンスについて、まず片っ端から調べてみようと思いパソコンで検索をかけた。何人かハンガリーの友人にもお願いをして、ハンガリアンダンスについて調べてもらった。その結

果、ハンガリアンダンスは、ハンガリー刺繍同様、ハンガリーの庶民の生活の中に根差したものであり、即興や、それぞれの地域の中で口伝えにより伝承されたものが多く、明確なステップの型として記録され始めたのは、そう遠い昔のことではないと知った。

ダンスの中には、歴史上貴族文化や、宮廷の歓楽を目的として発展を遂げたものもあるであろうが、ハンガリアンダンスは、庶民の楽しみ、またその民族の誇りの証として密に受け継がれたものあると考えた。今回、私は子どもたちに、歴史上、ハンガリアンダンスはこの地に生きた人々によってとても大切に守られてきたことを知った上で、ハンガリーに暮らす私達日本人は、そのダンスを踊ることでハンガリー

の一人ひとりの想いに触れてほしいと願った。そして迎えた本番、15人の子供たちは、舞台上で誰もがみんな輝いていた。

終了後、子供たちの中から、次のような感想が聞かれた。

「内心どんなに苦しくても、ダンス後半も笑顔が保てるようになったが、きつい練習中は、どうしても楽しんで踊ることができなかった。しかし、本番は必死に踊ったためか、あっという間だったが、確かに楽しいと思う瞬間だった」

子どもたちが輝く瞬間を子どもたちと共に創り出すこと、その瞬間を子どもたちと共有できることは、子どもたちに携わるこの仕事の中で、最も胸高まり、心躍る瞬間であると私は感じる。

そして、15人の子どもたち全員が輝いたハンガリアンダンス、15人全員を大きく成長させてくれたハンガリアンダンスは、やはり素晴らしい。

私のハンガリーの知人が言うとおり、ハンガリアンダンスは世界一素晴らしいダンスだ。そして15人の子どもたちも、また世界一素晴らしい子どもたちなのだ。

(なかにたに・かずよ 日本人学校教諭)

第21回大吉杯マッチプレー決勝戦対戦記

竹山 朋博

ゴルフのマッチプレー競技というのは、日本のアベレージゴルファーにとって縁のないものだ。そもそも2人だけのゴルフ予約が難しい。現に小生もハンガリーに来て初めてマッチプレーを経験したが、心理的な駆け引きも相まってとにかく「アツク」なる。1m程度のパットを決めただけでもガッツポーズが出てしまうし、当然ながら負けると実に悔しい。家に帰って何故あそこで…と一人反省会が始まり、延々と終わらない。

そんな小生が今度こそと誓って仕事以上(確信)の集中力で臨んだ第21回大吉杯マッチプレー大会。1回戦から好調を維持し、上司・同僚達の並々ならぬ協力もあって、なんと決勝まで駒を進めることができた。

決勝戦は大会史上初の連覇を目指す金広正人さんとの勝負。金広さんは準々決勝、準決勝と18番ホール、サドンデスまでもつれ込む接戦を制して勝ち上がり、勢いも気迫も十分に見えた。

1週間前から上司を交えて作戦会議という名の皮算用が始まる。お互いのハンディキャップ(以下HC)は金広さんが15で小生が8、その差を8掛けして6つのホールに1打分のHCが金広さんに与えられる。社内作戦会議上(就業時間外)ではその「HCホール」に偏りがあることが見つかる。6ホールの内実に4ホールが6番から10番に固まっている。きっとこれが試合の流れを作る(ように見える)。つまり、必然的に、序盤有利→中盤不利→後半トントンという流れになるわけだ。

その後、何度も脳内シミュレーションが行われた結果、HCのない序盤5ホールに最大限の集中力でかかり、可能な限り差を広げて金広さんの氣勢を削ぐ作戦となった。

11月1日土曜日。霧が立ちこめる中、遂に決勝戦が始まった。

1、2番でいきなりナイスショットが重なり連続パーでスタート。作戦通り序盤から2upのリードを奪う。しかし3番ショートで金広さんが7mに付けてパー、4番でもアプ

ローチをベタピンにつけ連続パーを奪われ振り出しに。さらに5番ロングでは3パットをやらかし、そこは引き分けとなったがここまでイーブン。もはや作戦は立ち消え一気に苦しい展開になってしまった。ただ「シ



ョットは好感触だし、ここからなんとか踏ん張りたい」なんて思っていた。

6番はなんとか引き分けに持ち込むが、7番で負け遂にリードを許す。しかしHCのない8番ショートで取り返しイーブンとなり、9番ロングを迎える。9番は多くの池が絡む最難関だが、金広さんが池に落としてしまい、小生有利となり勝ち。作戦は全く機能しなかったが、1upリードで前半を終えた。

しかしここで霧が濃くなりコースはクローズ。勝負は翌日へ持ち越しとなる。

翌朝も霧がでて、ゴルフ場側が一時クローズを宣言し、我々は再開まで待機。緊張しながら待つのは正直しんどいものだった。

3時間後、霧が晴れた10番ホールから勝負は再開。ティショットはボチボチ、残り150mラフからオンして思わずヨッシャー!と叫んだが、金広さんが3打目をピン奥2mにつけ、それを沈めてパー。残念だがHCが効きここは金広さんの勝ち。

続く11番はお互い決めきれず分け、12番は金広さんのティショットが右の斜面へいってしまうミスとなり再び1upのリードを奪った。そこから13番、14番はまたもやお互いにパットを決めきれず分けとなり1upのリードを保ったものの、プレッシャーのせいか前日と違ってミスが多い展開だった。しかし15番ではお互い2オン。先に打った小生が残り1.5mを残したのに対し、

金広さんがなんと12mの下りラインを読み切りパーディで四度目のイーブン。正直これはマズい!と浮き足立ったように思う。

16番ロング、追いついた金広さんに勝利がちらついたのかティショットが右のウエストエリアへ、さらに2打目もウエストエリアから出られず。こちらもティショットミスで残り約280mが残るラフからの第2打。胃の痛みが増す中「ココが勝負所だ!」という声が聞こえた(気がした)。ココで相手のミスにつけ込めれば「相手の心を折れる」のではと閃いたわけだ。そうなると緊張感が急に抜け、アドレナリンが噴き出してきた。かくして2打目はナイスショットとなり残り100m地点へ、実際これで流れが来たように思う。結果パーで1up。

名物ホール池越え17番ショート、金広さんは18番HCの前倒しを宣言。しかし小生のティショットはピンの僅か左を通過しピンフラッグと重なるパーディチャンスとなる。それがプレッシャーになったか定かではないが、金広さんのティショットは僅かに届かずバンカーへ、そこから3オンとなり4打目はわずかにカップを外れ勝負あり、2&1で小生の勝利となった。

こうして振り返ってみるとなかなかの好勝負だったのではと自画自賛してしまうが、長い歴史を持つこの大会では過去にも「アツい」勝負がなんども繰り広げられている。この大会を主催されている大吉店主の飯尾欽哉さんには本当に感謝するとともに、次回第22回大会は幹事として大会を盛り上げていきたい。

最後に、次回大会に参加してみたいと思われる方は、まず日本人ゴルフ部に参加いただきHCを取得する必要があります(ゴルフ部HCを本大会に使用している)。3月末あたりから開催となりますのでそれまでに取得して頂ければ間に合うこととなります。多くの参加者で次回も「アツい」大会になることを祈っています。

(たけやま・ともひろ

Ryowa Hungary Trading)

ウェールズでゴルフの日々

北川 達彦

思いがけずハンガリーに長期出張となり、ウェールズ日本人会ゴルフ部員としてはハンガリーでもプレイすべく、ゴルフ道具を積み込みハンガリーにやってきました。つてをたどりハンガリー日本人会ゴルフ部の方々の知己を得、ハンガリーでも一番のコースと言われているパンノニアで無事初ラウンドをすることができました。ハンガリー日本人会ゴルフ部の皆様、ありがとうございます。

さて、私が住んでいるウェールズのカーディフ近郊のゴルフ事情を紹介したいと思います。スコットランドには、セントアンドリュースをはじめ、ミュアフィールドやターンベリー、イングランドにも昨年の全英オープン開催のロイヤルリバプール、ウェント・ワースやサニング・デール等、綺羅星のごとく有名なゴルフ場がありますが、ウェールズにもゴルフ場が多々あります。ウェールズはイギリスの西の果てですが、サウス・ウェールズには約170のゴルフ場があり、住居のあるカーディフ近郊にもゴルフ場は多く、自宅から車で1時間圏内のゴルフ場は50近くあります。ウェールズはフラットなイングランド、アイルランドに比べ、山や溪谷、川があり、そ

のためゴルフ場も海岸沿いのコースはリンクスですが、他は比較的アップダウンの多い森林コースが多いのが特徴です。その中でもなんとと言っても有名なのは、ケルティック・マナーです。ここにはTwenty Ten,



Montmerie, Roman Roadsという3つの18ホールコースがありますが、有名なのはTwenty Tenで、その名のとおり第38回のライダーカップが2010年に開催されました。米国チームからはタイガーウッズ始め、ミケルソン、パッパ・ワトソン、リッキーファウラーらが、迎え撃つ欧州チームはケルティック・マナーのコース名にもなっているコリン・モンゴメリー主将始め、マキロイ、ウェストウッド、ルーク・ドナルド、マーティン・カイマー等著々たるメンバーが激戦

を繰り広げ、欧州チームの勝利に終わりました。今でもロッカー・ルームには彼らの名前が刻まれており、Twenty Tenでラウンドするプレイヤーは自由に使用することができます。

このほかにも300年ほど前の狩猟の宿がクラブハウスになっているRolls of Monmouth。ここは1767年から1987年まで、あの車で有名なロールスロイスのRolls一家が所有していました。カーディフ近郊にあるVale Resortには2つのコースがあり、Wales Nationalコースは全長が7433ヤードで米国を除き世界で一番長いコースとのこと。このように歴史

もあり景観がすばらしく、ゴルフ好きにはたまらないチャレンジしがいのあるコースが数多いウェールズには是非おいで下さい。ハンガリーに比べ暖かいウェールズは雪さえ降らなければ一年中プレイができますし、グリーンフィーもハンガリーに比べ格安です。但し、冬場は雨が多いためフェアウェーはかなりぬかりますが…… それともう一点、ハンガリーとは違ってヤード表示ということをお忘れ無く。

(きたがわ・たつひこ

Tri-Wall Europe Ltd.)

編集部よりのお知らせ



「ドナウの四季」のHPが完成しました。これまで掲載されたすべての原稿を読むことができます。 <http://www.danube4seasons.com>

皆様の原稿をお待ちしています。エッセイ、ハンガリー履歴書、自己紹介、サークル紹介などの記事をお寄せください。提出いただいた原稿は、紙面統一の編集のために修正することがあります。修正した原稿は執筆者の校正をお願いしています。

原稿は電子ファイルで、morita.magyar@gmail.comへお送りください。Word文書あるいは一太郎文書でお願いします。EXCEL形式での提出はお控えください。写真および図形は別ファイルで送付ください。

私の近況

金子 三勇士

2014年を振り返って

2014年は私のキャリアにとっても、画期的な年になりました。コチシュ・ゾルターン率いるハンガリー国立フィルハーモニー管弦楽団の日本ツアーにソリストとして参加し、憧れのマエストロ・コチシュ指揮のもとでコンサートを行えたことは、大きな財産になりました。マエストロ・コチシュのCDを聴き、ピアノを勉強したいと思った幼年時代のことがまるで夢のようです。日ごろの練習が厳しいことで知られるマエストロですが、リハーサルでは温かく接していただき、「僕ならここはこう弾くんだが」というようなアドバイスをいただき、たいへん参考になりました。



それから早くも半年が経ちました。マエストロ・コチシュをはじめ団員の皆さんと一緒に過ごした時間、リストの音楽に燃えた公演全てが、私に再びハンガリー人魂が蘇るような感動を与えてくれました。その蘇った魂のおかげか、秋にはもう一つ自分のハンガリアン・アイデンティティを意識する出来事が起きました。それは、人生二度目のリスト音楽院への受験でした。

2014年の春に東京音楽大学大学院を修了し、次のステップである博士号(DLA, DMA, PhD)取得への進学を考えました。音楽的活動と両立する環境を考え、最初は東京、ロンドン、ニューヨークのいずれかの音楽院への挑戦を考えました。しかし、演奏活動への理解の壁、演奏博士課や研究博士課の縛りが多いカリキュラムの問題に直面し、どちらも断念せざるを得ませんでした。そこで、志望校としてリスト音楽院が候補に浮上してきました。リスト音楽院は11歳から16歳まで「特別才能クラス」に在籍した、私の母校でもあります。

前々からフランツ・リストに関連する事

柄を研究したいと思っていたので、リスト研究の本場であるハンガリー、そしてリストが創立者の音楽院へ進学することは、自分にとって自然なことと思うようになりました。

申込み書類を提出した後、研究計画書の提出、ピアノの技術試験、面接試験、筆記試験と続き、受験そのものは極一般的な流れでしたが、久しぶりに受けるハンガリー語の面接や筆記試験はかなり緊張しました。ハンガリアン魂のおかげで、全ての試験を無事合格しました。ということで、今回は博士課程といった特殊な環境ではありますが、8年振りにリスト音楽院に在籍することになりました。

すでに日本とハンガリーを適宜往復しながら、リストの楽譜等の研究作業を始めています。これから、博士課程カリキュラムをこなしながら、日本と外国での演奏活動をどのように並行して進めて行くのかが、当面の挑戦になります。

2015年の予定

2015年5月に、マエストロ・小林指揮のMAV交響楽団と共演することが決まっています。ハンガリーで久しぶりに本格的なコンサートの舞台に立たせていただきます。それも、尊敬する小林研一郎先生との夢の共演とは本当に嬉しく、光栄に思います。5月5日はZeneakademia、5月7日はMUPAにてMAV交響楽団とチャイコフスキー：ピアノ協奏曲変ロ短調を演奏します。(なお、同じプログラムは5月4日にミシュコルツ、5月8日にペーチで演奏されますが、地方都市のコンサートではFarkas Gábor(ファルカシュ・ガーボル)がソリストとして共演します。)

実はこの曲、マエストロとの思い出の作

品なのです。2009年、当時19歳の私が日本で初めてマエストロとご一緒させていただいた時の作品です。東京国際フォーラムと大阪国際会議場にて、この協奏曲を弾かせていただきました。マエストロからの貴重なアドバイスをいただきながら、その後も日本国内で何度か演奏してきました。そして、昨年(2013年)ロンドン・アビーロードスタジオにて、マエストロの指揮でロンドンフィルとの夢のような共演が実現し、この作品のCDをレコーディングさせていただきました(2013 Exton Octavia Records)。

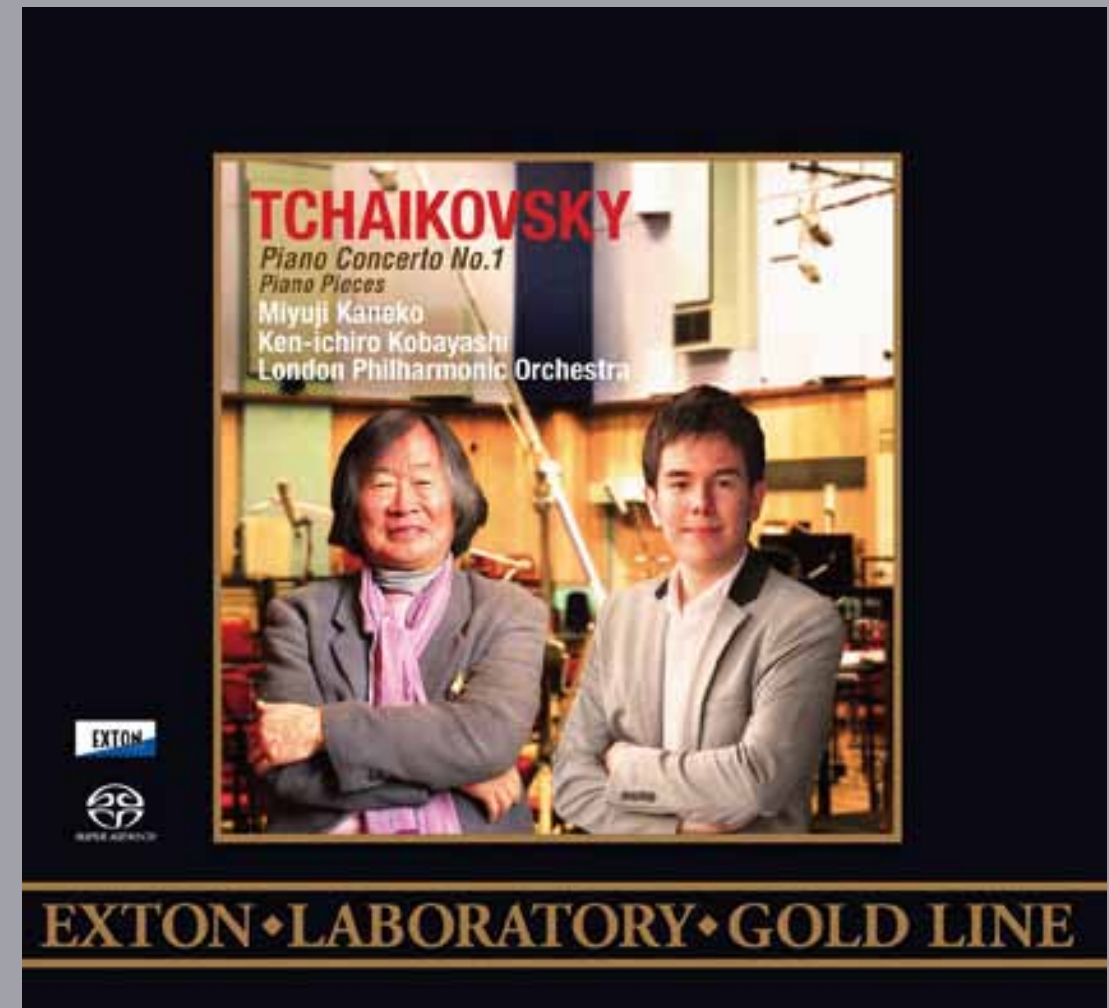
くみ割り人形や白鳥の湖と同じほど有名なピアノ協奏曲ですが、ロマン派時代の感情的な構成でありながら、チャイコフスキーならではの率直な音楽性が大きな特徴です。その率直さがあるからこそ、弾く側の人間も、聴く側の人間もストレートに音楽を理解し、誰でも気軽に楽しむ事ができる名曲になっています。

今回この思い出の曲を、僕のもう一つのふるさとであるハンガリーで皆様に披露できる事を今からワクワクしながら心待ちにしています。マエストロの熱い指揮とハンガリーのオーケストラとの特別なチャイコフスキーを、是非お楽しみください。なお、コンサートプログラムの後半は、ムソルグスキー(ラヴェル編曲)「展覧会の絵」になります。

このコンサートへの出演の機会を通して、リスト音楽院でも博士課程に必要な研究を進めていきます。このような形でコンサートと博士課程の勉学が並行して行えることが、私にとって大変ありがたい環境です。

さて、最近のことですが、縁があって、2ヶ月程前から池坊いけばなの教室に通いはじめました。日本の伝統文化であるいけばなは想像以上に奥が深く、意外な所で音楽や芸術との共通点を発見しています。そういう視点からも、習い事の一つとして、続けていく予定です。

(かねこ・みゆうじ ピアニスト)



小林研一郎と金子三勇士



日本人学校のドナウ祭



みどりの丘補習校



「ハンガリー・日本文化交流イベント」シュミット前大統領、加藤喜久子臨時大使を迎えて



コルナイが綴る 20 世紀中欧の歴史証言

池田信夫「21世紀最初の10年ベスト経済書」第2位にランク
「週刊ダイヤモンド」2006年ベスト経済書第9位にランクイン

コルナイ・ヤーノシュ自伝

—思索する力を得てコルナイ・ヤーノシュ【著】 盛田常夫【訳】

◆好評発売中！ ◆定価 4935 円（税込） ◆A 5 判 / ISBN 4-535-55473-0 日本評論社



体制転換 の経済学

黄色の教科書シリーズで知られる専門学部の定番テキスト。体制転換の理論と転換直後の現状を分析。各大学で教科書として使用。

盛田常夫著

第一部 社会主義経済の失敗

社会主義崩壊をもたらした社会的退化への論理を構築。交換経済と再分配経済の比較分析に新たな視点を提供。

第二部 ポスト社会主義経済

体制転換の過渡期の問題をすべて取り上げ、解決の道筋を示す。地域による体制転換の違いを解明。

■ 新世社 新経済学ライブラリー20 定価2781円(税込)



なぜハンガリーは独創的な科学者を輩出したのか

20 世紀を創ったハンガリー人 マルクス・ジョルジュ【著】 盛田常夫【編訳】

■ 定価 3045 円（税込） A 5 判

■ ISBN 4-535-78331-4

異星人伝説

「週刊文春」(米原万里)、「週刊ダイヤモンド」(北村伸行一橋大学教授)で書評。
ハンガリーは 20 世紀の科学の発展に貢献した多くの頭脳を輩出した。大きな足跡を残した科学者たちの評伝。

体制転換20年の歴史的・理論的総括の書

ポスト社会主義の政治経済学

体制転換20年のハンガリー：旧体制の変化と継続

新しい概念を駆使して、体制転換以後の中欧社会の状況を分析。

日本経済新聞(2010年3月21日)ほか、多数の書評。

旧来の定説を覆し、新たな知見を広げる革新の書。

盛田 常夫著 日本評論社 定価3800円

